

スポーツ博物館将来構想検討会議（第5回） 議事要旨

日時：平成30年12月13日（木）13：00～15：00

場所：日本スポーツ振興センター本部事務所 大会議室1

出席者：【委員】黒川座長、井上座長代理、泉委員、真田委員、寺澤委員、前田委員、
山下委員、來田委員

【オブザーバー】 JOC 松丸常務理事、JPC 中森事務局長

【JSC】大東理事長、小菅理事、今泉理事、河村スポーツ博物館長 ほか関係職員

議 事：

1. 本検討会議の「審議のまとめ」（案）について
事務局から資料1について説明し、質疑応答。

[委員からの意見]

- スポーツ博物館のナショナルセンター化という観点から、スポーツ博物館に日本で一番多くの、あるいは価値のあるスポーツ関係資料がある。だから、日本で最高のものを創るんだという流れと理解しているが間違いないか。体育系大学等が資料をたくさん持っている可能性があるので、スポーツ博物館の資料の価値とネットワーク化の中心なんだということを強調すると良いと思う。
- 「審議のまとめ」で前提としているスポーツが近代スポーツなのか、もっと幅広いものか、イメージが湧きにくくなった。JOCがオリンピックミュージアムをつくるということは、近代的なスポーツは基本的にそこに集約され一つの象徴的な場所が出来上がるということ。そこからすると、実はスポーツはもっと文化的に幅広く、そこが守備範囲だということを表現する形が良いと考える。例えばコンセプトに「スポーツ及び人類が築いてきた身体的なあそび文化」などのニュアンスを入れることはできないか。もうひとつは、そのイメージでスポーツを捉えたときに「伝える」だけで物足りなく、「継承」という言葉があっても良いと考える。本文中には出てくるが、タイトル部分に出てこないとな人の意識が薄くなってしまう。そうすると本文と一体化してくる印象がある。
あまり近代スポーツにこだわりすぎると、資料の切り分けができなくなり、集まってきた資料の「いる」「いない」の価値をどうやってつけるのか難しくなることを心配している。
- 近代スポーツとはどの範囲なのか教えてほしい。
- いろいろな捉え方があるが、ひとつの分け方として、国際的に認知されたものかどうか。国際的な競技協会があって、共通のルールがあるものが近代スポーツと考えられる。一方、ローカルな地域で行われている、さまざまな遊びも含めたものは「民族的スポーツ」や「伝統的なスポーツ」などと呼ばれる。日本にはいろいろな文化的、伝統的なものがあり、例えば綱引きでも地域によって豊作を願うものから子供の成長を願うものもある。そうしたものの中に実はスポーツの本来もっている意義があるのかもしれない。近代スポーツも源を探っていくとだいたい「伝統的なあるいは地域の民族的なスポーツ」で
- やはりスポーツ博物館は、スポーツのストーリーや事象、歴史も対象となるので、近代スポーツだけでなく伝統的なスポーツも視野に含めたほうがいろんな人が来やすいと思う。
- スポーツに対する理解が本当に共通のものなのかということが気になった。誰もがスポーツと言いながら、違うものを思い描いていると、できあがったものが全然違う形で独り歩きしてしまう。スポーツ博

博物館に保存しているものは近代スポーツに関するもののほかにもたくさんあり、それはどう扱うのかという問題がある。

- この博物館がスポーツだけでなくスポーツ文化ということをも含んだ活動が必要だろうということはこれまでも出てきた。スポーツ文化をもう少しコンセプトの中に盛り込んでどうか。
- スポーツの定義は、100人の学者がいれば100人のスポーツの考え方がある。また、いまeスポーツがスポーツかという議論があるように、時代によっても変わりうる。だから、あまりコンセプトでスポーツの範囲を狭くしてしまうと議論ができなくなるし、そういう勉強、研究をしていくのもひとつのこのスポーツ博物館の意義だと思う。現在、スポーツ庁が日本学術会議に「スポーツの価値」の普及について審議を依頼しており、スポーツの範囲についても整理が必要としている。我々としては、近代スポーツという狭いジャンルではなくて、スポーツは幅広いというイメージを持っておけばいいのではないかな。
- 「スポーツ」とは何かと定義するのは非常に難しいと思う。あいまいだというご意見も多々あるかと思うが、一方で、それがスポーツの本質を表していると思う。
- 「スポーツの多様な価値」とあるが、スポーツそのものも「多様」である。近代スポーツ史だと近代スポーツのもっている価値観に引きずられてしまう。もっと広いものが実はスポーツで、日常生活に根差したものが、近代スポーツ、国際スポーツに発展していく、それがまさにスポーツなんだというような見せ方も学ぶものが多い気がする。JOCのオリンピックミュージアムがオリンピックに特化した近代スポーツ・国際スポーツの象徴としてのミュージアムになるので、それとの差異を考えると、スポーツ博物館は幅広い要素を見せ、スポーツとは何かということを考えさせるものがおもしろい。そうなると、例えば「民族とスポーツ」など、民俗博物館との連携により、スポーツの持っている多様な価値が人々の生活を豊かにしてきた面を取り上げるなど、国内外の多様な博物館と連携するイメージがあってもいいと思う。そういった形で見せていくことができれば、日本にない、世界にもないであろう、意味、価値のある博物館になるのではないかなと思う。
- 今お話があったように、スポーツの範囲をあまり冒険的に書くのは危険で、定義がはっきりしていないということは良くわかるので、前提となる「スポーツの理解」や、「根源的におもしろいと思う世界」を展示する場所、考えてもらう場所だということが伝わるよう、数行の説明を付け加えたらどうか。
- 事業内容について、専門的な人材の確保に関する記載があるが、予算を誰がどこから出すのか明記したほうが良いのではないかな。また、教育普及事業の担当者は学芸員とは別に配置が必要なのではないかな。これまでの議論の内容が実現できる運営体制でなければいけないということに対して、運営形態や体制に必要な予算の措置があるのかということをも明記した方がよいのではないかな。
- 私も同感で、学芸員の中に、モノを扱う人間、教育を扱う人間、そして保存を扱う人間という意味が含まれると思ってはいたが、明確にしたほうが良い。また、例えば「国とJSCとの連携により」など主語を明確にすることも必要ではないかな。最後の部分にまとめて書いてあるが、「審議のまとめ」の中で、項目ごとに明確にしておいたほうが良いと思う。「運営に当たっては、国が責任をもって継続的な支援を行う」ということも必要。博物館が設置されるスタートの段階で人員の確保を謳っておかないと後からではどうしようもないことがある。
- 人員の確保について、新たに項目を立てて書けないかな。
- JSCだけでは予算の確保は無理なのでスポーツ庁がしっかり関与することは大切。「審議のまとめ」には、そういうかたちで謳っていただきたい。
- 事業内容について、案文ではスポーツ博物館とスポーツ関係博物館やスポーツ関係の研究者との連携と

しか見えず、限定的に見えるので、例えば「スポーツ関係博物館等」を「博物館等」とした方が良いのではないか。手助けをしてくれる人は多い方がいい。また、スポーツ博物館には1964年東京大会の組織委員会の資料や、文書系の資料が多数あるので「図書室」を「図書・文書資料室」としておいて、アーカイブリストを置かないとだめという発想になるようにした方が良いと思う。「図書館」あるいは「図書室」という言葉に、一般の方がどういうイメージを持っているかを想定すると、今回イメージしたものが本当に国民に伝わるのかを懸念している。

- 図書資料と文書資料の違いについて、ここでは、博物館主体の議論になるので文書資料の説明はしないが、要は扱いが難しい一点ものの一次資料として扱う文書類か、一般的の人が来て雑誌と同じような並びで見えるものかで区別できると思う。
- 事業内容の「収集・保存」の中で、収集方針の策定に当たって学会等と連携して検討するとされているが、一方で2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の資料について収集するとある。戦略上の特別な意味がなければ、ここだけあえて具体的に明示する必要はないのではないか。大枠としてスポーツの資料を保存する場所であれば、ここだけ具体化しなくても、その議論は専門家が入った状態で、収集方針の中で決めてもいいのではないか。
- 東京2020組織委員会は最終的に2021年には解散する。その時に資料をどう保存していくか、JOCを中心に東京都、組織委員会がひとつのプロジェクトを進めていくことになっている。
- 補足すると、アーカイブ組織を2020年の大会に当たって作り、そこがアーカイブ管理の主体になることになっており、そのアーカイブ組織にJOCがなる予定である。そのため、2020年の大会に関する資料については、JOCのミュージアムに主だったものを保管するが、すべてを保管・管理することは困難なため、分散保管をお願いしていくということになる。
- 全体的な話になるが、「審議のまとめ」が表に出ていくと、スケジュール感のイメージがなんとなく出てくるが、最終的にこの「まとめ」はどのようなプロセスを経て決まっていくのか。具体的に4つのフェーズを示しているが、何年頃までに決めるなどが見えないのはどうかと感じる。これは当然スポーツ庁、文部科学省も入って、政策的なことや予算も関わるので、相当覚悟を持って決めていく必要がある。
- この審議のまとめの発表をJSCのHPで公表した後に、各会議の資料等の公開ということだが、いつまでに最終案をまとめて発表をするのか。また、パブリックコメントのようなものをするのか。
- 名称について、新国立競技場に設置される秩父宮殿下の御遺品が入る部屋の名称は決まっているか。また、今の綾瀬倉庫の契約期限があるので、今の環境を限りなく維持できるよう、新しい設置場所が決まるまでの管理の部分も必要だということを追記するべきである。
- 別紙の第1～第4フェーズまでの資料について、「再開館に向けた工事等」の記載をもう少し見直せないか。博物館の設置は簡単ではないので、基本設計、実施設計、工事とフェーズどおりに行かない気がする。このとおりに進まないで、いろんな歪が出てきてしまう懸念があり、例えば予算の見通しを上手く立てられなくなったり、やりたいこととの誤差ができて、後から苦しくならないか。
- 資料の意図としては、各フェーズ中で行うべきことを具体的にイメージするためだと理解している。年数はなるべく短いほうがいいが、第4フェーズまで進めるためにはかなり予算も必要になると思う。
- 例えばメディアの方からどこまで進んでいるか聞かれた時に、基本設計は終わっていないという返事をする、まだ第1フェーズにとどまっているという印象になる。そういう印象を持たれないような書き方のほうが良い気がする。例えば表の中の区切りを矢印で示し、一連の流れとして整理してはどうか。
- フェーズという言い方をしないほうが良いのかもしれない。

- フェーズそのものは置いておくほうが良く、一緒にするべき作業としては大切なことが書かれている。しかし、館としてハードが仕上がることとソフトの準備が一体化していかない場合があるので、最後には館ができあがるという整理のほうがより良いのではないかと。
- 11 ページ「(6) 運営形態及び体制」、「(7) 名称」、「(8) 収入確保策」の並びについて、「名称」と「収入確保策」は順番を換えた方がいいのではないかと。運営系がきて、次に名称だと、違うところに行ってしまうので、運営と収入確保を並べた方がいいと思う。また「(8) 収入確保策」にある、「休館前の入館者数を上回るような目標」は当たり前で、そこを目標にするのはいかがか。「広報についても実施することが望ましい」についても、「実施する」と言い切っているのではないかと。
- 「Ⅲ. スポーツ博物館の再開館に向けた今後の計画」の最後のまとめで「具体化して進めていただきたい。」とあるが、もう少し適当な表現はないか。
- コンセプトを受けて、5 ページのところでそれを具体化させる「事業内容」がある。その冒頭にある総論の3つのパラグラフ、この柱書は後ろの具体的な内容と重複する部分があり、3つ目のパラグラフはコンセプトに置いた方が良く感じる。また、各項目の並びについて、「運営」に関わる項目の中でどれが一番頭に出したいのか。「名称」が一番上でもいいのではないかと。「収入確保策」の2つ目のパラグラフは、官民連携の問題なので表題がこれで良いのかという感じがする。また、来場者数について敢えてここで記載するかどうか、もう少し広い漠然とした言い方でも良いかもしれない。中身の問題ではなくどのように見せたいか、並びようで見向きが違うと思います。
- 「ネットワーク」の構築が大きな位置づけになるが、「交流」に記載はあるものの、もう少しネットワークについて、どういうものを作り、役割分担はどういうものかを書いた方がイメージが沸くと思う。
- スポーツ博物館の再開館に向けては、例えば設置エリアの問題など JSC だけでは判断できない非常に難しい問題がある。関係機関と連携しながら、慎重に対処していく必要がある。
- 収蔵庫ができるまでかなりの時間がかかる場合、いまは収蔵庫にかなりの経費がかかっている分を何とかしていかなければいけない。移動するだけでも大変だが、研究目的などで一時的にお金が必要に預かって貰うなど考える必要がある。将来の見通しが立たない中で、綾瀬倉庫を借り続けられるかもわからない。安定した場所で預かってもらうやり方は考えたほうが良い。
- 思うほどの予算が引き出せないことも想定しておかなければいけない。
- 箱を作るのは莫大な経費がかかる。だから、出来ている箱を利用するのが、この置かれている状況では一番良いのではないかと気がする。

(黒川座長)

- 本日いただいたご意見の取扱いは、事務局と私で調整させていただき、最終的な取りまとめを座長にご一任いただきたい。

(座長一任とすることについて、委員より了承を得た。)